

論文の内容の要旨

論文題目 「初期仏教における聖典成立と修行体系」

氏名 ビック ターナ ヴットー

本論文の課題は、現存仏教聖典の組織およびその主な内容がいつごろ成立したか、現存聖典に釈尊の直説を読み取ることができるか否か、そして、初期仏教聖典における修行道の体系化のあり方を解明することである。

聖典成立の考察には仏滅年代が深く関わってくるため、第1章においてはまず、仏滅年代をめぐるセイロン説と有部系説についての従来の学説を種々の角度から再検討した。

第2章は、律蔵の成立について論じた。その際、従来注意されることの少なかった衆学法と小々戒との関係や律蔵の特殊性、また口伝の性質に注目して考察した。

第3章においては、パーリ語の故郷、教理の発展段階と聖典成立、五部・四阿含雑蔵の成立時期について論じた。

第4章は、初期聖典に見られる修行道を解明しようと、八聖道を三学や四念処などの他の修行道と比較検討した。

以下に、考察の結果明らかになった点をまとめる。

1. Aśoka 王の即位年代

現在学界において通説となっている感のある中村元の Aśoka 王即位 268B.C. 説は、彼の自説である Candragupta の即位年 317B.C.、自己矛盾の多い Purāṇa による Candragupta および Bindusāra の合計在位年数 49 年という、二つの極めて不安定な要素により算定されたものである。本論文は、Aśoka 王の摩崖法勅第 13 章に記されている 5 人のギリシア王の共通在位年代と、Candragupta の即位年代、そしてセイロン伝が示す同王即位から Aśoka 即位までの 56 年、という 3 要素から算定し、Aśoka 王灌頂即位は 267B.C. であるとの結論に達した。

2. 仏滅年代

仏滅年代をめぐる諸説があるが、その根拠の別により大きくは 2 説、すなわち Aśoka 王即位を仏滅より 218 年後に置くセイロン説、100 年とする有部系説とに分かれる。

セイロン伝の記述は、有部にない極めて具体的な内容と年代を示すが、確実な歴史的証拠によって否定された例はなく、むしろ各分野の研究が進展するに

つれ、その正確であることが証明されつつある。宇井伯寿および H. Bechert はセイロン説否定を唱えるが、彼らが提示する根拠は信憑性に欠け、それらはかえってセイロン説を擁護するものとなり得ることが分かった。

一方の有部系伝承は、仏滅と深くかかわるマガダ王統史を伝えるが、その半数の王についての記述や師資相承の年代に誤りや矛盾を見せている。また有部の仏滅 100 年説はそもそも、Kālāsoka と Aśoka との混同に端を発していることが分かる。

本論文はセイロン説 218 年を擁護する立場をとる。そしてこの 218 年を Aśoka 王の即位 267B.C. に加えた 485B.C. を仏滅年代と考える。

3. 波羅提木叉と第一結集

波羅提木叉は釈尊が制定し、波羅夷法、僧殘法、波逸提法などの組織も第 1 結集の時に既に成立したと考えられる。というのも、衆学法と波逸提法の 2 条を除いた残りの波羅提木叉はすべて、諸律の間で一致するからである。ここで衆学法が、同種の問題を取り扱いながら条数の点で諸律の間はかなり違いを見せているのは、これが小々戒であって、釈尊の許可に基づく限り改変可能だったことに起因する。

このような事情を見落として、衆学法と他の 7 項目の波羅提木叉とを同列に扱い、条数の違いを根拠に唱えられているのが、波羅提木叉の仏滅後漸次成立説である。

波羅提木叉はひとたび制定されたなら、すべての比丘の生活を制約する。この点は経典と異なる。波羅提木叉はこれに反すれば罪が伴うため、一度確定したら容易には増広されない。そして半月ごと誦出することが各現前僧伽において義務づけられていることから、その内容はよく保存伝持される。現存諸律の波羅提木叉の内容がよく一致するのはこのような事情による。

4. 犍度部と第 1 結集

犍度部もまた第 1 結集の時にすでに成立していた。犍度部は諸律間でよく一致するが、それは、その伝承が口伝によりなされ、集団的行為を必要としたこと、また、先に取り上げた波羅提木叉と同様、犍度部の内容はすべての比丘の生活、また僧伽の運営と密接に関係することが、その規定の中核的内容は改変されにくくしたからであるといえる。

5. 聖典の伝承体制

仏在世中、教団は既に広範囲に展開していた。そのような大僧伽を統治運営するには、諸規定及び伝承体制が必要不可欠である。仏教教団には王族出身や Veda の伝承体制の知識をもつバラモン出身の比丘が多数存在し、教団の統治能力と伝承体制を作る能力は十分あった。又、釈尊の伝道活動は 45 年間であるが、その間、教団はその内部もまた取り巻く環境も比較的安定していて、聖典とそ

の伝承体制を作成する時間があったと考えられる。

伝承体制については、釈尊が25年間安居を続けた Sāvattihī が釈尊の教えの発信地であり、大寺院においては持律者、持法者、説法者など比丘たちの間で専門ごとに房舎が分配され、釈尊と同居する専門比丘たちが釈尊の制する諸規定や教理、または法の解釈などを口伝に適する形に整理分類し、各地の比丘僧伽に伝えていた。この伝承の過程が数十年間繰り返されるうちに、九分教などの文学的形式が成立し、仏滅後第1結集の時に、それらが再整理されたのである。

6. Suttantika と bhāṇaka の両語と聖典編纂

前2世紀ごろに作られたと言われる Bhilsa と Bhārhut の碑文には suttantika と bhāṇaka という語が記されている。しかし、経に精通する者を意味する suttantika という語は四ニカーヤには全く現われず、Mahāniddeśa や Aṭṭhakathā には多数存する。これにより四ニカーヤの編纂は suttantika という語が普及する前に終了したと推測される。そして bhāṇaka という語は Mahāniddeśa を含む聖典に1回のみ記されているが、Milindapañho や Aṭṭhakathā に多数説かれている。よって、bhāṇaka という語の普及は Mahāniddeśa を含む聖典の編纂終了以後と Milindapañho や Aṭṭhakathā の編纂終了以前であることが分かる。

このように、碑文に記されている語句が各種の文献においてどのように使い分けられているかは、その文献の成立年代決定に重要な根拠となることを明らかにした。

7. パーリ語

パーリ語は釈尊当時のマガダ地域の言語である。釈尊が説法の時に用いた言語は主にこのパーリ語である。しかし、釈尊は比丘各個人の言語によって仏語を習うことを許可した。仏滅後、第1結集において編纂された聖典の言語はパーリ語である。聖典の偈頌の部分と散文の部分は同時期に作成されたものであるが、多くの偈頌に現われる極めて不均質な性質のものや同一詩句に存在する新旧言語の混在などは、古い慣用表現を用いる偈頌編集者らによって作られたものである。

仏滅後、釈尊の神格化に伴い、パーリ語は釈尊の用いた言語として重んじられ、聖典語となった。しかし、遠隔地にあつて教団の力が未だ不十分な地域では、釈尊の許可に基づいてその地域の言語で聖典を伝承して来た。これが後代になって複数の言語による聖典を生むことになるのである。

仏滅後、マガダ地域の言語も徐々に変化した。殊に仏滅後約40年ごろのマガダ国の Pāṭaliputta への遷都はマガダ語に更なる変化をもたらす。a 語基単数主格は e で終るといふ Pāṭaliputta の方言の特徴は首都の言語として普及し、約200年後の Aśoka 王時代に当時のマガダ語の特徴となった。r の代わりに l が使用されるあるいは、s の代わりに ś が使用されるという後代のマガダ語の特徴も徐々に現

われ、5世紀ごろにはこの三つの語形はパーリ語と相違する当時のマガダ語の特徴になった。

8. 思想史研究方法の問題点

思想史の研究手法自体に問題がある。すなわち、新古を決定するために種々の教理を比較する際、その教理の術語に字面の内容しか読みとらず、その術語が複数の次元にわたって、違った意味をもつといったことへの視点が欠けている。また、縁起説のような同一の教理が種々の形をもって現われる場合でも、それは対機説法や伝承上の誤りによって生じた可能性を排除できない。従って教理の発展段階を根拠として経蔵の大部分が仏滅後漸次に増広されたとする主張は、多くの問題を含むものであることは明白である。

9. 五部・四阿含雑蔵と第1結集

五部・四阿含雑蔵の組織より先に九分教の組織はあった。この九分教の組織は仏在世中に成立したものであり、第1結集の時にそれが再整理されて五部・四阿含雑蔵の組織が出来上がったのである。従って、九分教の組織が五部・四阿含雑蔵より古いと言っても、それは必ずしも五部・四阿含雑蔵の組織が第1結集より後代に成立したという根拠にはならない。

口伝という伝承上の特性を考慮し、五部・四阿含雑蔵が第1結集より後代に成立したと考える場合も、大衆部も含めた現存諸部派の経蔵全てがこの組織を持つことはありえない。

様々に検討した結果、五部・四阿含雑蔵の組織は第1結集の時に成立したものであり、また経蔵の内容の大部分は仏在世中に既に成立していた。

10. 八聖道と十無学法

八聖道は有漏と聖・無漏の両側面を有し、それぞれの次元で現われるべき「螺旋的修行道」である。十無学法と八聖道とは、同次元の優劣の関係にあるのではなく、目的地と道程の関係にある。三学の修習方法は八聖道と共通する。しかし三学系統は段階的修行道として表現されたものであるのに対して、八聖道は三学のそれぞれの段階に現われる修行として示されるべきである。四念処と七覚支は有漏の正定と聖・無漏の八聖道に相当し、定と慧の相互関係のメカニズムを表現したものに他ならない。